

ポール・クローデルの劇作品に みられる愛について

大 賀 淳

ポール・クローデルの詩劇のなかで、かれ自身の信仰上の危機といわれ、また人妻との不倫の恋愛による苦悩の時期とを経て創作された「真昼に分かつ⁽¹⁾」、とかれの晩年に書かれてその集大成といわれる「孺子の靴⁽²⁾」、およびかれの劇作家としての初期のころからいろいろと想を練って書きかえられて、1911年43歳のときに脱稿された「マリヤへのお告げ⁽³⁾」との、三悲劇のなかに描かれた「愛」について考えてみたいのである。

すでにジャック・マドウル⁽⁴⁾を始めエルネスト・ボーモン⁽⁵⁾などの人々が、キリスト教者としての立場、またはその文化圏に属している者の立場から触れているところであり、エルネスト・ボーモンはダンテの神曲のベアトリーチェとクローデルの諸作品のヒロインたちとの関係あるいは類似を指摘して、クローデルの作品中の愛の意味と方向とを探っているのであるが、ここではクローデルの作品を通して感じとった、その「愛」について述べたいと思うのである。

上記の三作品において、「真昼に分かつ」は、その初稿が1906年であるから一番早い時期に書かれている。

インド洋をシナへ向かう船上真昼に起こりはじめ、それから数年のちのシナの暴動のときのある夕闇の中に終わる、一人の女性を取り巻く三人の男性によって演じられる、醜くも悲しい愛の悲劇である。

この作品の創られる数年前に、クローデルは聖地イエルサレムを巡礼し、聖職に入ろうとするが、挫折してふたたび外交官として支那へ行く途中、

船上でポーランド人である人妻と恋愛して、数年間不倫の恋に苦悩した時期があった。そうした作者の愛の苦悩の経験を経て生まれた作品であるということと、作者がきわめて強固なカトリックの堅信の人であったということ念頭において、この作品をみてみたいのである。

この悲劇には、強烈でぎらぎら照り輝く太陽の下で、際限なく横たわる海原の上の揺れ動く船上で、確かな生活の当てのない遠い外国へ不安を持ちながら向かっている人々が、本当の自分というものを見詰めさせられるという、一つの極限状況が設定されている。

そうして、「真昼に分かつ」という題名と、—— *Midi au ciel. Midi au centre de notre vie*⁽⁶⁾。【天空に真昼の時わたしたちの人生の中央にある真昼時】

このメザの言葉にみられるように、これらの人々は今までの人生に訣別して、新しい人生へ船出をしたのであるが、それは不安なしかも真昼ののちの夕闇に至る人生である。

この悲劇の起こる内的な原因は人それぞれの心の姿と、それぞれの心の絡みあいの中にあるのはもちろんであるが、クロードルの多くの作品にみられるように、女性が主動的・原因的であることは、この作品においても同様であって、それは子どものある若く美しい人妻イゼである。

このイゼと夫ド・シスとの関係をみると、この内的な原因が明瞭になる。すなわちアマリックがメザに対してド・シスを評する言葉

—— *Mais ce mari qu'elle a, ce beau fils,*

Ce maigre Provençal aux yeux tendres, cette espèce d'ingénieur à la manque,

Vous voyez bien pue c'est un vice pour elle. Il n'a su que lui faire des enfants⁽⁷⁾。

【それにしても彼女の亭主、美男子のお坊ちゃん、やさしい目をした南仏男、役に立たない技師の見本、こりゃ罪悪だよ。あの女のために。子どもを産ませるしか

能がないのだから。]

にみられるように、こういった優しそうで平凡なド・シスとイゼは夫婦として結ばれるのである。

Quand il me regarde d'une certaine façon, j'ai honte. De ses grands yeux noirs, (on ne peut rien voir dans ses yeux),

Le coeur me tourne, ah, j'ai plus tôt fait de lui laisser faire ce qu'il veut. J' ai essayé, je ne puis lui résister pas. ⁽⁸⁾

〔あの人があたしを見つめる独特の目つき、こちらが恥かしくなってしまう。大きな黒い目だわ（あの人の目のなかには何も見えないの）あたしの心はくらくらとなる、あっ、と思って気のついたときは、あの人のいいなりになっている。努力はしたわ、でも逆らうことはできなかった、全然。〕

このようにイゼがアマリックに述懐するように、イゼは平凡に女らしく家庭をもち、子どもを育てることになる。

しかし、アマリックがメザ に対してイゼを評する言葉、

Ce n'est pas une coquette, méfiez-vous-en! c'est une guerrière, c' est une conquérante!

Il faut qu'elle subjugue et tyrannise, ou qu'elle se donne Maladroitement comme une grande bête piaffantel!

C'est une jument de race ⁽⁹⁾.....

〔浮気女じゃない、用心したまえ！ 女戦士だ、征服者だぜ！ かの女が支配し、絶対権をふるうか、あるいはかの女のほうで、まるで足をばたつかせる大きなけだもの同然、無器用に身をまかせるか、二つに一つ！ 純血種の牝馬さ……〕

また、アマリックがイゼに対し、かの女自身を評する言葉、

Le même noir tout à coup sur l'air. Libre et droite, hardie, souple, résolue. ⁽¹⁰⁾

〔虚空を切りぬくように、突如、立ちはだかる同じ黒い影。自由奔放な、すくっと立つ、大胆で、しなやかで、毅然とした。〕

72. ポール・クロードの劇作品にみられる愛について

にみられるように、自由奔放で毅然とした、エキセントリックな面もあるイゼは夫ド・シスを全面的に完全に愛することはできず、また自分が愛されているとも感じないのである。それはイゼとアマルリック、およびイゼと夫ド・シスとの次のような対話にみられる。

AMALRIC.—……Il vous aime cependant.

YSE.—Il ne m'aime pas!…… Il n'aime que lui.⁽¹¹⁾

YSE.—Et puis la vie est venue, les enfants sont venus, et maintenant vous voyez comme me voilà réduite et obéissante comme un vieux cheval blanc.⁽¹²⁾……

[アマルリック——あの男はやっぱりあんたを愛している。

イゼ——愛してなんかいないわ! あの人は自分しか愛さない。

イゼ——それから人生というものがやってきた、子どもたちができた、そして今では、ごらんとおり、すっかり飼い馴らされて、従順になった、まるで……白い老いぼれ馬]

YSE.—N'avez-vous pas eu de moi votre compte et votre content ?

Et vous, est-ce que vous me connaissez ? est-ce que vous savez qui je suis?⁽¹³⁾

YSE.—Moi, je suis bien à lui ; est-ce que ce n'est pas assez ?

Il y a une certaine totalité de moi-même que je n'ai pas fournie ; il y a une certaine mort que je saurais lui donner ; ……

Parce qu'une chose est mauvaise, parce qu'elle est folle,

Parce qu'elle est la ruine et la mort et la perte de moi et de tous,

Est-ce que ce n'est pas une tentation à quoi je puis à peine tenir ?……

Et je voulais penser que je serais maintenant bien tranquille, Que j'étais garantie, qu'il y aurait toujours quelqu'un avec moi pour me conduire, un homme quelque idée que j'aie, quelqu'un qui saurait bien toujours être plus fort que moi. …… Mais toi, qui te connaît, qui

aura foi, qui trouvera en toi de quoi comprendre et se dévouer? Tu fuis, tu n'es pas là.⁽¹⁴⁾

[イゼ——あなたは、おのぞみのものをあたくしから手に入れたはず? それでいてあなたは、あたくしのことをご存じかしら? あたくしが誰なのかおわかりなの?

イゼ——あたくしはたしかにそのひとのもの。それで十分ではないの? このあたくしが、ある意味で、そっくり完全にあたくしになること、それはまだ実現されていない。なにか、ある種の死、それをその人にあげられるはずの。なぜって、ある一つのことを悪いからよ、それは気違いじみている、それは潰滅であり、死であり、あたくし自身とすべての人がほろび去ることなの、それは、あたくしがいま、かろうじて身をふせいでいる誘惑ではなくって? そしてあたくしはこう考えたかった。これでやっと落ちつけるだろう、あたくしは守られている、いつも誰かがあたくしを導いている、あたくしがどんなことを考えようと、一人の男が、誰かあたくしよりもいつも強くていられる人が、ついててくれるんだって。

それがあなたという人、誰にわかります。誰にあなたを信じあなたのうちになにか理解できるたね。まことをつくすきっかけを見つけることができまして? あなたは逃げる。いまいたところにもういない]

このように、イゼの心のなかには夫に対する不信と不満が満ちているのである。それは愛に対する渇きであり望みである。

イゼは「愛」をほんとうに完全に自分自身になることであり、相手に対しては、ある種の死として捧げられるもののことと考えている。でも、それはかの女にとってまだ完全に理解し、感受されていないものであって、それを完全に知ろうとして動きだそうとする自分を、しかも、それが破滅に至ることをも予感している自分を、現状（家庭があり、子どもがある、普通の平凡なもの。）に結びつけてくれる絆として夫を感じようとするが、ド・シスはその絆となり得ないことに不信と不満をいただくのである。

しばしば「私はイゼ、それはあたくしなのです。」と、イゼが決然とい

い放つ場面が出てくるが、これがほんとうに完全に自分自身になって、それを相手にある種の死として受け入れさせようとするイゼの内心の欲求であり、自己の立場あるいは行動への決意と考えられる。

かの女は自分自身になろうとし、そうして、それを全面的に完全に受け入れた相手は破滅へと導かれることになるのである。

それは現状からの脱出であり、その意味で現実に対する自己の抹殺、つまり死であり、不在なもの、つまり「愛」に対する限りない欲求であり、望みである。

こういった愛の葛藤を生み出すために、クロードルは劇構成上に配慮をする。それは「禁じられた愛・禁じられた女」という設定である。

これは作品中に、しばしば用いられている表現でもあるが、「マリヤへのお告げ」ではヴィオレーヌが癪者になったことであり、「縞子の靴」と、この「真昼に分かつ」では、プルエーズおよびイゼが人妻であることである。中世ヨーロッパでは癪者は罪の報いを受けたものと看做され、社会から身をひそめ人里離れた地で乞食をして暮したものらしい。カトリックの掟では離婚は認められなかったし、もちろん、人妻の不倫はいずれの社会でも容れられるはずがないものである。

したがって、イゼがほんとうの自分自身になろうとするとき、そうしてほんとうの愛を実現しようとするときかの女は現状から脱出しなければならない。それは夫と子どもを捨てることであり、社会的に破滅することでもある。

こういった外的・内的な要因がインド洋上の船上で結合して動きだし、この悲劇の序幕があけるのである。

イゼを脱出させる相手は二人である。アマリックは、かつてイゼが心を動かしたことのある、現実的で自信と力と野望に満ちた人間である。かれはイゼの真の姿を前記のように見抜いている。イゼはアマリックの男性らしさと、その力に、そうして自分の真の姿を認めて許容してくれるこ

とによって、心をひかれるのである。

ほんとうの自分を受け入れてくれることでは、かの女の愛についての考えの一つは成就される。すなわち完全に自分自身になることが成就されるのである。しかし、アマリックは現実にも強く固着した男であり、社会的な掟や、他者への思いやりなどは捨て去っても、この現実の世界で生きぬいて行こうとする男である。このことは第三幕の、南支のある港町で暴動のとき、メザと別れたイゼが、アマリックと同棲している最後の場面で、アマリックがメザを打ちのめしてメザの通行証を奪い取り、さらに爆薬を何掛けて自分たち（イゼとアマリック）だけが逃れようとする場面に見られる。

アマリックは社会的にあるいは人間性の面で自分を拘束しないゆえに不死身である。したがって、アマリックは、イゼの考える相手にとって「ある種の死」となるものとして、自分を捧げる相手ではない。そのために、アマリックはイゼにとって、肉的な情愛を充足させるだけの情夫で終わるのである。

ここで魂と肉体の問題がおこってくるのであるが、これはカトリックの作家であるクローデルを理解するには、強い現実性をもった問題として捉えなければならないのであるが、とにかくイゼにとってアマリックは、かの女の内面にまだ方向を見出すことができずに彷徨している魂を、そうしてその「愛」を充足させてはくれないのである。

「繻子の靴」では、この魂の歩むべき方向を、プルエーズに対して守護天使が導くわけであるが、クローデルの宗教上の危機のすぐ後に書かれ、クローデル自身の迷いを反影してか、宗教性があまり前面に出てこないこの作品では、イゼにとって最後まで魂の「愛」の充足は予感としてしか得られないのである。

このアマリックに相当する人物は「繻子の靴」ではドン・カミュである。カトリックに対して背教徒であり、アラーに心傾けるこのモール人の

血の流れている色黒いスペイン人は、美しい貴婦人であり、従兄の妻であるプルエーズの肉体を執拗な柔軟さで、プルエーズ自身から与えるように追い求める。ドン・カミュにとって、スペインというカトリックの一つの世界に反逆することも、また人妻という「禁じられた女」を手に入れることも、なんらかれを拘束しないわけである。

アマリックと同じように、現実には自分のおかれた世界から脱出しながらも、それはかれにとって「ある種の死」とはならないのである。

「繻子の靴」の構成をみると、このクロードルの作家として人間としてすべてが集大成されたといわれている、複雑で全世界を舞台とし数多くの人物が登場する作品でも、クロードルの劇作の二大テーマの一つ「世界の所有」（「クリストフ・コロンの書物」に明確に示されている。）ということを除いて、「愛」という点からみると、その構成は「真昼に分かつ」と同じである。

ドン・ペラージュの若く美しい妻ドナ・プルエーズは「禁じられた女」であり、ほんとうの自分自身になりたいとしてドン・ロドリグの方へ脱出しようとする。

プルエーズの夫ドン・ペラージュは、自分のもとを逃げだして、負傷したドン・ロドリグの館にいるプルエーズを訪ねる第二日目の第三場で、ドン・ロドリグの母ドナ・オノリアに次のような婚姻についての見解を述べる。

DON PELAGE——Ce n'est pas l'amour qui fait le mariage mais le consentement. …mais le consentement en présence de Dieu dans la foi : ……Où aurait-elle trouvé une telle demeure pour l'accueillir? Le fronton était mis sur la colonne.⁽¹⁵⁾

〔婚姻を作るのは愛ではなく同意なのですからな……ただ神を前にしてなされる同意なのですからな……自分を迎えてくれるこれほどにいい住所を、あれはどこに見出せただうか？ 破風はもう柱の上におかれていたのに。〕

クローデルの劇作品では、愛による互いの救済または真の愛の結合が夫婦においてなされずに、愛人との間に成就される場合が多いように、ここには婚姻は肉的結合であり、地上において生きるための慣習・利便のためというクローデルの結婚観が出ているように思われるのであるが、とにかくドン・ペラージュに答えてドナ・オノリアは次のように答える。

DONA HONORIA — Si beau que soit le toit d'un autre, on aime mieux celui qu'on a aidé soi-même à faire. ⁽¹⁶⁾

[他人の家の屋根がいかに美しかろうと、人は自ら努力して建てた屋根のほうをずっと愛するものでございます。]

さらにドン・ペラージュはプルエーズに対する自分の気持ちを述べる。

DON PELAGE — C'est elle (la Mère de Dieu) qui m'a instruit «en toutes choses de chercher la paix».

Et moi, c'est cette paix que je voulais lui donner, à cette jeune créature qui semblait faite pour elle, ……Qu'importe, quelle m'aime si je réussis à lui faire du bien, si je réussis à apprendre à un seul être ce que je sais, et à remplir un seul cœur de joie et de connaissance !……N'était-ce pas le paradis où je l'avais mise au milieu de choses excellentes ? ⁽¹⁷⁾

「あらゆるもののうちに平和を求めること」を私にお教えくださったのはその方です。私は、その平和をあれに与えたいと思った。あの年若い被造物は平和のために作られているように見えたからです。

あれが私を愛しているかどうかは問題ではなかった。もし私があれに善を与え得るならば、もし私がただひとりの女に私の知っていることを教え得るならば、そして喜びと認識とによってただひとつの心を満し得るならば！

私があれをおいたのは、天国のはずだったのに。そこには卓れた物だけが満ちていた。]

このようにして、互いの真の愛の交流なくプルエーズは人妻となるのである。一方そのプルエーズは夫の後を追ってアフリカの蛮地へ行くとき、

夫ペラージュに自分の保護と監視を頼まれたドン・バルタザールに夫と自分のことを話すのである。

DON BALTHAZAR——Comment votre mari a-t-il pu vous épouser, lui vieux déjà, et vous si jeune?

DONA PROUEZE——Je m'arrangeais sans doute avec les parties de sa nature les plus sévèrement maintenues, les plus secrètement choyées.

…S'il m'aime, je n'étais pas sourde pour que je l'entende me le dire.

Bien des fois j'ai cru le saisir dans ses yeux dont le regard changerait dès que le mien voulait y pénétrer.

Presque tout le jour il me laisse seule, et c'est bien lui, cette maison déserte et sombre ici, si pauvre, si fière,

Avec ce tuant soleil au dehors et cette odeur délicieuse qui la remplit!⁽¹⁸⁾

[ドン・バルタザール——あなたのご主人は、あの年になって、どうしてこのようにお若いあなたを妻とすることができたのでしょうか？ ドナ・プルエーズ——もっとも厳しく保たれ、もっともひそかに大事にされてきた、あの人の性質のいくつかに、おそらく私が自分を調和させたからですわ。私を愛しているかどうか、それを私に告げてくれるあの人の声が聞こえないほど、私は聾ではありませんでしたもの。いくたび私は信じたことでしょう、あの人の目のなかにその言葉を捉えた。でも私のまなざしがあの人の目のなかを探るとすぐに、その色は移り変わってしまうのでした。いつもほとんど一日中あの人は私をたった一人にしておくのです、あの人はちょうどこの家そっくり、ここの、人気のない、陰気な、哀れな、傲慢な、この家そっくりですわ、外にはうんざりさせる太陽が照り、家の中にはこの甘い匂いがむんむんして!]

(プルエーズはスペイン人たちの中で一人だけフランス人なのである。)

このように、プルエーズもイゼと同様に夫との愛に疑問を抱き、夫に対し不満を持っているのである。

イゼには、そうしたとき、洋上の船中で、かの女を現状から脱出させる二人の男性、メザとアマリックに出会うのであるが、プルエーズにはすでに以前に会って、魂の愛を感じ熱愛するドン・ロドリグがいるのである。

かの女の現状から脱出しようとする心は、このロドリグに向かうのである。

しかし、プルエーズは宗教心による敬虔さのゆえに、その心を抑えようとする。そうして、聖母マリヤの像の両手の中に、片方の繻子の靴を脱いでおき、次のように祈るのである。

…Puisque ce lien entre lui et moi n'a pas été mon fait, mais votre volonté intervenante :

Empêchez que je sois à cette maison dont vous gardez la porte, auguste tourière, une cause de corruption !

…Je ne puis dire que je comprends cet homme que vous m'avez choisi, …

Alors, pendant qu'il, est encore temps, tenant mon coeur dans une main et mon soulier dans l', autre,

Je me remets à vous ! ……

Je vous préviens que tout à l'heure je ne vous verrai plus et que je vais tout mettre en oeuvre contre vous !

Mais quand j'essayerai de m'élancer vers le mal, que ce soit avec un pied boiteux ! …

J'ai fini ce que je pouvais faire, et vous, gardez mon pauvre petit soulier,

Gardez-le contre votre coeur, ô grande Maman effrayante!⁽¹⁹⁾

[私と夫のあいだにあるこの絆は、私の作ったものではなく、あなたの御心のお仲立ちによるのでございますから。それゆえ、妨げたまえ、あなたが厳かな門番としてその門をお守りくださるこの家の、私が腐敗の源となることを！ あなたが私

にお選びくださったあの人を、私は理解しているとは申せません。それゆえに、時の未だあるうちに、片方の手に心を、もう片方の手に靴をもって、私はあなたに委ねます！ 前もって申し上げます。まもなく私はあなたを見失うことをごさいます。やがて私はあなたに逆って、あらゆることを試みるでございましょう！
しかし、私が悪の方へ走ろうと試みるとき、どうか片足で走って行きますように！ 私にできることはもうしつくしました。あとは、ただ、あなたがお守りください、私の哀れな小さい靴を、お守りください、あなたのみ胸に抱き締めて。おお、大いなる恐ろしいお母さま！]

このプルエーズの祈りは、かの女の内心で葛藤する愛の苦悩の表白であり、イゼの愛の苦悩と本質的には同じものである。

ただ、イゼは愛の本質を予感しながらも、その方向を見出すことができずに摸索するのであるが、プルエーズは、本当の自分になろうとする点はイゼと同じでも、その宗教心のゆえに守護天使の導きもあって、相手ロドリグの魂を救うという悲願を伴うのである。

こうして、クロードルは「真昼に分かつ」と「繻子の靴」の愛の悲劇において、「禁じられた女」を中心に夫を配し、情夫を配する。これは普通の愛の悲劇となんら変わるところはなく、そこには肉体的・精神的葛藤と苦悩があり、それがクロードルのややもったいぶった長大な科白で朗々と展開するのである。

しかし、クロードルのヒロインたちはさらに真実な愛を激しく求める。

「真昼に分かつ」で、イゼはメザに対し、真実の自己と真実の愛のために純粋な恋を感じる。自分が禁じられた女であることで、多くの躊躇を感じながらも結ばれるのである。

メザという人物はアルマリックが評する、

AMALRIC—MESA. Il ne regarde rien. S'il fait attention, ce n'est pas à vous, mais seulement à ce que vous dites, comme si cela raisonnait tout seul.

Il est rude comme ceux qui ont en eux «Une grande semence à défendre.»⁽²⁰⁾

[アマリック —— メザか。かれはなにも見ない。もし注意をむけることがあれば、それはあなたにではない、ただあなたの言うことにです、まるで、人間ぬきでひとりでに理屈ができるとでもいうように。あいつは強情です。自分たちのなかに「守らねばならぬ高貴なる種子」とやらをもった連中と同じだ。]

の言葉にみられるように、またイゼがアマリックに言うように、

YSE——Un de ces hommes toujours prêts à offrir leur vie...⁽²¹⁾

[いつでも自分の生命をなげだす覚悟の人]

であって、現実を越えたその奥に、なにかを熱烈に求め、一途に思いこむ、理想を追う人物である。

現実を越えて、真実の自分になりたいと願い、真の愛を求めて止まないイゼは、必然的に、この現実に固着しないでなにかを求めている人物に心をひかれるのである。

船上で一人、恋愛小説を読んでいるところをメザに見られたイゼは、恋愛について次のように話すのである。

YSE —— C'est toujours trop long. Un écrit d'amour, cela devrait être si soudain qu'une fleur, par exemple, un parfum, vous voyez bien que l'on, a tout eu, qu'on a tout, que l'on aspire tout d,' un seul trait, que cela vous fit faire ah! seulement;

Un parfum si droit, si prompt, que cela vous fit sourire seulement, un petit peu: ah! et voilà que l'on est parti!⁽²²⁾

[いつだって長すぎるわ、恋愛の物語って、はっと思うほど緊迫感がなければならぬはず。たとえていえば、花や香りのように、わかるでしょう。いっさい合財を得てしまった、いっさいを手にしている、いっさいをすいこんでしまう一息に、それはあなたに「あっ!」と言わせただけ、一直線に、すばやくとどく香り、それであなたはうっすら笑う、ほんのちょっとだけ、「ああ!」って、心はすでにとらえ

られている!]

イゼは人間のいっさいの知性による判断を抜きにした、魂と魂による直観的な愛の合一を考えている。それに対し、メザも男女の愛について次のように答える。

MESA——C'est tout en lui qui demande tout en une autre!

Il ne s'agit pas d'un enfant! c'est lui pour naître, on ne sait comment, qui profite de ce moment que nous trouvons de l'éternité.⁽²³⁾

[かれのなかのいっさいがもう一人のなかのいっさいを求めるのです、子どものことではない生まれるのはかれ自身なのです。どのようにしてかは知らないが、永遠のなかから、ぼくたちが自分たちのために見つけだすこの瞬間を利用して。]

ここでは、人間の単なる好悪の感情を越えた愛による合一を、そうして、その愛による本質的な生まれ変わりを希求しているのである。かれらがいま、互いに感じている、好感を表明しあう情緒的な単なる恋愛は問題にはならない。その奥にあって、かれら自身が共に生まれ変わり、昇華していくものを、この現実を乗り越えさせてくれる「愛」を互いに求めようとして、かれら自身にもまだはっきりとはわからない、魂の底から出てくるような言葉で対話を交わすのである。もちろん、これにはクロードルの人生上の一つの危機において、苦悩しつつ思索された魂の叫びが、イゼとメザの対話の形で表明されているのである。

このようにして、イゼとメザは、イゼのいう

YES——Il y a entre nous un tel suspens, un état d'exclusion si fin
Que la plus mauvaise petit pensée le dérange.⁽²⁴⁾

[あたくしたちのあいだにあるこの身動きもできぬ状態、二人以外のすべてのものを排除してしまう雰囲気、それはほんのちょっとでも悪い考えを起こそうものなら、かき乱されそう。]

といった、抜きさしならない恋に落ちてゆくのである。

そうして、ほんとうの自分と真実の愛を予感しながら、イゼは次のよう

にいうのである。

YSE—Et maintenant c'est moi comme une sotte qui ne sait plus que dire, comme quelqu'un qui est réduit au silence et qui écoute.

Vous savez que je suis une pauvre femme et que si vous me, parlez d'une certaine façon,

Par votre nom, par un nom que vous connaissez et moi pas, entendart,

Il y a une femme en moi qui ne pourra pas s'empêcher de vous répondre.

Et je sens que cette femme ne serait point bonne pour vous, mais funeste, et pour moi il s'agit de choses affreuses! Il ne s'agit point d'un jeu avec vous.⁽²⁵⁾

[ところがいまは、あたくしは馬鹿みたいになにをいったらよいのかわからず、なにもいえずに、ただ、だまってきいているだけ。あたくしは哀れな女にすぎないのよ、そしてあなたがそんなふうにお話しになると、大きな声をお出しになる必要はない、ただあたくしの名で呼んでくだされば、あなたの名で、あなたをご存じて、あたくしは知らないある一つの名で呼んでくださると、そしてそれがきこえてくると、あたくしのなかで一人の女が、あなたに答えずにはいられなくなる。この女はちっともよい女ではないような気がします、あなたにとっては。それどころか、不吉な女、あたくしにとってはおぞましいこと！ あなたとは遊びごとではありません。]

これは後に、女性というものが男性にとって、「真実の自己」に、そうして「神の国に生まれ変わる」ための契機になるというクローデルの「愛」についての考えの出ている「繻子の靴」で、解答が与えられるロドリグがプルエーズを呼んだ、あの魂に聞こえてくる「星」、つまり天使のいう「導きの星」という呼び名と照応するところであり、またイゼが前にいった「愛とは、ほんとうに完全に自分自身になって、それを相手にある種の死

として受け入れさせる。」ということの表明である。

イゼの夫ド・シスが仕事のための遠地へ出発する日、メザとイゼは港を見下す丘の上の墓地で結ばれる。これもクロードルらしい大まかにみえてその実周到な、地上的・習慣的愛の死を象徴する設定である。この現実の世界での愛の姿はメザとイゼの対話の中に描かれる。

MESA—Ainsi donc je vous ai saisie! et je tiens votre corps même
Entre mes bras et vous ne me faites point de résistance, …

Il est vrai que vous n'êtes qu'une femme, mais moi je ne suis qu'un
homme, et voici que je n'en puis plus…

Comment est-ce qu'il faut vous appeler! Une mère, parce que vous
êtes bonne à avoir.

Et une soeur, …

YSE—O mon Mesa, tu n'es plus un homme seulement, mais tu
es à moi qui suis une femme, et je suis un homme en toi, et tu es
une femme avec moi, et je cueille ton coeur sans que tu saches
comment.

…De ne plus se retrouver supérieur à personne, mais ce qu'il y a de
plus faible, un homme entre les bras d'une femme, comme une chose
par terre

Qui ne peut plus tomber, rien qu'un pauvre homme à la fin entre
mes bras. ⁽²⁶⁾

〔こうしてとうとうぼくはあなたをとらえたのか! このあなたの体をしっかり
ぼくの腕につかまえている、あなたはもっともさからわない、……ほんとうだ、あ
なたは一人の女にすぎない、だが、ぼくだって、ただの男にすぎないのだ、そして
ぼくはもうこれ以上がまんでできない……あなたをなんと呼べばよいのか! 母と
も、なぜって、あなたといっしょにいと、心がやわらぐのだから、そう、妹と
も、……

イゼ——ああ、あたしのメザ、あなたはもう、ただの男ではない、あなたは女であるこのあたしのもの、そしてあたしはあなたのなかの男、あなたはあたしに対して女、そしてあたしは、あなたの気がつかないうちに、あなたの心を摘みとってしまう。

自分は誰よりもすぐれているなんてもう考えなくなるのは、ずっとまじなことではなくって？ もっとも弱いことなのよ、女の腕に抱かれた男、地面に落ちた品物同然、もうこれ以上落ちられぬ、とうとうあたしの腕に抱かれた哀れな男、それ以外のなにものでもなくなってしまった]

さらに

MESA —— mais j'étais un homme de désir, désespérément vers le bonheur, ...ah, tu n'es pas le bonheur! tu es cela qui est à la place du bonheur!

Et je t'épouse avec un amour impie et avec une parole condamnée,...

YSE —— C'est l'amour, Mesa, et je ne l'appellerai point une chose bonne et usagère...

Sais-tu bien ce que tu fais, Mesa?⁽²⁷⁾

— [メザ——ぼくは、激しく求める男だった。幸福に向かって絶望的に……

ああ、きみは幸福そのものではない、！ きみは幸福のかわりにあるものだ。ぼくはいま不貞の愛で、禁じられた言葉できみを妻とする。

イゼ——それは、メザ、愛というもの、それをあたしはよいもの、役に立つものだなんてけっして呼ばない……

メザにはわかっているの、自分のしていること？]

このような対話にみられるように、現実の中で肉によってくずれ落ちようとする愛は やがて、かれらの魂の中で除々に昇華されるのである。

YES——ô main de l'amour! ô déplacement de notre coeur!

O ineffable iniquité!

Il est donc vrai, Mesa, que j'existe seule et voilà le monde répudié,

et à quoi est-ce que notre amour sert aux autres?

Et voilà le passé et l'avenir en un même temps renoncés, et il n'y a plus de famille, et d'enfants et de mari et d'amis,

Et tout l'univers autour de nous

Vidé de nous comme une chose incapable de comprendre et qui demande la raison!

MESA—Il n'y a pas de raison que toi-même.

YSE—Moi, je comprends, mon bien-aimé, et je suis comprends, et je suis la raison entre tes bras, et je suis Ysé, ton âme!

Mais ce que nous désirons, ce n'est point de créer, mais de détruire,

Il n'y ait plus rien d'autre que toi et moi, et en toi que moi, et en moi que ta possession, et la rage, et tendresse, et de te détruire et de n'être plus gênée détestablement par ces vêtements de chair,

Ah, ce n'est point le bonheur que je t'apporte, mais ta mort, et la mienne avec elle, ...

Je sente ton âme, un moment qui est toute, l'éternité, prendre la mienne.....

MESA — La sens-tu bien maintenant dans ton sein, la mort de l'amour et le feu que fait un coeur qui s'embrase?

Et voici une sécession dans mon coeur, et tu es Ysé, et je me retourne monstrueusement vers toi, et tu es Ysé!

YES—Je suis triste, Mesa. Je suis pleine; Pleine d'amour. Je suis heureuse.

ô comme je me sens une femme entre tes bras, et j'ai honte et je suis heureuse.

MESA—Ysé, il n'y a plus personne au monde.

YSE—Personne que toi et moi. —Regarde ce lieu amer!

Regarde ce jardin maudit!

Non, ceci n'est pas un mariage qui unit toute chose à l'autre, mais une rupture et le jurement mortel et la préférence de toi seul!

…et je ne cesserai point de t'aimer, oui, quand je serais damnée, oui quand je serais près de mourir!⁽²⁸⁾

〔イゼ—おお、愛の、この力ある腕よ！ ああ、あたしたちの心が入れかわる。ああ、言葉ではいえぬ邪悪の業！ それではほんとうなのね、メザ、あたしだけがこの世に存在してるってこと、こうしてもう世界は捨て去られているって、そうよ、あたしたちの愛が他人に、なんの役に立つというの！ そう、いちどきに、過去も未来も、こうしていまは否定されて、ここにはもう家族もない、子どもも夫も友人もない、そしてあたしたちをとりかこむ全宇宙からあたしたちは除外されてしまった。あたかも理解力のないもの、理由を求めているもののように、ね？

メザ—きみのほかに理由なんてない

イゼ—あたしには、わかる。

いとしいひと、そしてあたしはわかってもらえたわ、あなたの腕のなかの理由、そしてあたしはイゼ、あなたの魂なの！ しかし、あたしたちが激しく求めているのは、けっして創ることじゃない、破壊すること……あなたとあたしのほかは、もうなにもなくなることよ、あなたのなかにあたしだけ、あたしのなかにはあなたを所有することだけそして狂気と、やさしさ、あなたを破壊することなのよ、そう、うんざりするようなこの肉体なんて衣裳だのに、もう邪魔されないことなの、ああ、仕合わせなんてものじゃない。あなたにおとどけするのは、断じてちがう、あなたが死ぬこと、同時にあたしも死ぬこと、あなたの魂が、永劫の時であるこの一瞬に、あたしのに、触れて、あたしの魂をとらえる、

メザ—いま、きみは胸のうちにはっきり感じとっているだろうね、愛のつくりだす死を、心がまっ赤に燃えあがる火の手？ いま、ぼくの心のなかで、なにかが、離脱する。きみは

イゼ、きみのほうへぼくは向きなおるあさましい激しさだ、このきみはイゼ！

イゼ——あたしは悲しい。メザ、悲しいわ。

あたしはいっぱいになった。愛でいっぱい。あたしは悲しい、あたしは仕合わせよ。ああ、あなたの腕に抱かれていると、ほんとうによくわかる、自分が女だったことが。あたしは恥かしい。しかもあたしは仕合わせ。

メザ——イゼ、この世にもう誰もいない。

イゼ——あなたとあたし以外、誰もいない。——

この陰気な場所を見てよ！ この呪われた庭を見て！ ちがうは、これは結婚ではない。結婚って、すべてを他のものにむすびつけるもの、これは破壊だわ、死へと導く冒瀆の誓いよ、あなただけを選ぶことよ！ あたしは絶対にやめない、あなたを愛することを。そうさ、たとえあたしが罰せられても、そう、たとえあたしが死ぬ間際になっても！]

こののち、夫ド・ミスを死んだってかまわないと呪う言葉を吐いて、メザがちょっと気弱くたしなめる場面が続いて終幕へとすすむのであるが、しかし、イゼもメザも、まだ本当の自分を、そうして本当の愛とはどんなものなのかを、はっきりと捉らえ見詰めてはいないのである。

したがって、かれらはやがて別れ別れになり、さらに苦悩の試練を受けなければならないのである。肉体と魂の問題に判然とした区別をつけられなかった、イゼとメザは、互いに離別の苦しみ、裏切られた愛の苦しみを味わい、不在の愛を前にして一年を過ごすのである。

肉体の欲望に完全に打ち勝てず、したがって、自己犠牲をまだ本当には知らなかったイゼは、現実を代表するかのようなアマリックと結びつき、さらに汚濁の生を、魂の苦悩の道をたどるのである。

しかし、メザとの間にできて、アマリックとの間で育てた子どもも死に、夫ド・シスの死も告げられたイゼは、アマリックのもとを逃がれて、爆薬の仕掛けられた家の中で、傷ついて倒れている、死を前にしたメザの所に戻ってくる。そのイゼの戻る直前に、いっさいを与えあうことができ

ずに別れなければならなかったことを悔いて、今は死を前にして、自分のすべてを捧げられる心に目を開いたメザは、神を讃美して頌歌を歌うのである。ここで、メザは愛を本当に理解するのである。すなわち、これはクローデルの「愛」とはいかなるものなのかということに対する解答であり、神への帰依なのである。

CANTIQUE DE MESA——（クローデルが聖職に身を捧げようとして答えを得られなかったことを示すような神への呼びかけ続く。）

Et vous ne m'avez point accepté, et c'est l'autre qui nous a pris.

Non, Non, mon Dieu! Allez, je ne Vous demande rien!

Vous êtes là et c'est assez.

Parce que je Vous ai aimé...

La gloire refuse les curieux, l'amour refuse les holocaustes mouillés.
Mon Dieu, j'ai exécution de mon orgueil!

Sans doute je ne Vous aimais pas comme il faut, mais pour l'augmentation de ma science et de mon plaisir.

Et parce que j'étais un égoïste, c'est ainsi que vous me punissez

Par l'amour épouvantable d'un autre!

Ah! je sais maintenant ce que c'est que l'amour et je sais ce que Vous avez enduré sur votre croix, dans ton Coeur,

Si vous avez aimé chacun de nous terriblement comme j'ai aimé cette femme,...

Mais je l'aimais, ô mon Dieu, et elle m'a fait cela! Je l'aimais et je n'ai point peur de Vous, et au-dessus de l'amour il n'y a rien, et pas Vous-même!...Et elle m'a fait cela!

Ah, Vous Vous y connaissez, Vous savez, Vous, ce que c'est que l'amour trahi!

Mon crime est grand et mon amour est plus grand et votre mort

seule, ô mon Père, la mort que Vous m'accordez, la mort seule est à la mesure de tous deux!⁽²⁹⁾

[メザの頌歌から——あなたはそれを、お納めくださらなかった、そして、ぼくらをつかまえたのは別のやつでした。ちがう。ちがう、ぼくの神さま！ よろしい、ぼくはあなたになにも求めない！ あなたはそこにいらっしゃる、それでたくさんだ。なぜなら、ぼくはあなたを愛したからだ…… ところがほんとうは、捨て身でとびかかるべきなのだ！ 栄光は物好きを拒む。愛はしめった犠牲を拒絶する。神よ、ぼくは自分の傲慢さを呪う！ おそらく、ぼくはあなたを、正しく愛さなかったのだらう、ただ自分の知恵と自分のよろこびを増大させるために、愛したのだ。… … ぼくはエゴイストだった。それゆえに、あなたはこのようにしてぼくをお罰しになった。他人の、おそろしい愛によって！ ああ！ ぼくは、いまになって、わかった。愛とは何なのか！ ぼくにはわかる、あなたが十字架上で、その御心のうちで、なにを耐えしのんだか、ぼくたち一人一人に対するあなたの愛と同じように、おそろしいほど烈しいものであるなら、ぼくはあの女を愛しました。神さま、そのぼくにあの女はこういうことをした！ ぼくは愛していた。だからぼくは、すこしもあなたを畏れてはいない。そうです。愛の上には何物もない、あなたご自身すらもない！ そのぼくにあの女はこんなことをした！ ああ、あなたこそ、ご自分でよくご存じのはず、お知りになっていらっしゃる、裏切られた愛がどんなものか！ ぼくの罪は大きく、そしてぼくの愛はそれにもまして大きい。あなたの死だけなのです。父上よ、あなたがぼくに与えてくださる死が、死というものだけが、この二つのものの大きさに適うのです！]

ここには、クロードルがこの世における最高の愛として、人間の罪の身代わりになって十字架にかかれたキリストの愛を目指していることが示されているのである。クロードルが、かれの劇作品のテーマとした「神の国において成就される愛」は、ここに帰結されるのである。ユダに裏切られ、十字架上の苦悩を越えてさらに人間への愛を完とうされたキリスト。そのキリストの愛の姿。それがそのままクロードルの作品に現われる

愛の姿である。

肉体と魂の葛藤，そこから生じる苦悩，男性を苦悩に沈める女性（アダムを迷妄へ導き，楽園を追われて流謫に身をやつさせたイブ），愛の裏切り，完全なる自己犠牲，すなわち肉体の抹殺，本当の愛を自覚させる契機となる魂のけがれなき女性，愛する者との完全な合一への希求。

クローデルは，こうした明確な筋立ての上に，詩人としてまた信仰者として，洞察と，冗舌とを駆使して，壮大な，抒情にみちた詩劇を作りあげるのである。

クローデルの考える愛には，禁じられていることや不可能なものに魅了されるという願望も読みとれるように思われる。

そうして，男性にとって，女性はまたその反対に，女性にとって男性は，全世界と同様に自己の死を賭して手に入れる，永遠の生命に入るといふ鍵を与えるものである。そうして，男性も女性も，本当の自分というものになろうと希求して止まないのであるが，これは楽園にいた原罪のないアダムとイブに，つまり神に創られたままの人間に帰ろうとする衝動なのであろうと思われる。そうして，そのアダムとイブは，神の一つの命令にのみ従うとき，楽園を自由に所有していたのであるから，神の国において愛を成就したものはその楽園を所有するわけである。クローデルが劇作上のもう一つのテーマとした「世界の所有」ということも，「神の国において成就する愛」が成就したときに，同時に成就されるわけである。

それは別として，キリストの愛と同様の愛に目覚めた者のみ，この楽園に帰りうるわけである。

男性はそれを，女性を愛することによって獲ちうる。そうして，それは崇高な愛を感じさせる女性でなければならない。男性が渴仰して止まない聖性（Santeté）を感じさせる，聖処女マリヤのイメージをもった，魂のけがれなき女性でなければならないのである。

さらに，メザの頌歌は続く，メザはここで，いっさいの躰きのもとであ

り、キリストが十字架上で抹殺した肉体を、同じように抹殺する状況におかれている。爆薬で消し飛ばされようとしている家屋の中に、傷ついて動ごけずにいるのである。

CANTIQUE DE MESA—

Mourons donc et sortons de ce corps misérable!

Sortons, mon âme,...

Est-ce que c'est moi? Cela de cassé, c'est l'oeuvre de la femme, qu'elle le garde pour elle, et pour moi je m'en vais ailleurs.

Déjà elle m'avait détruit le monde et rien pour moi n'existait qui ne fût pas elle et maintenant elle me détruit moi-même.

Et que je ne puis me passer d'amour, l'amour, et à l'instant, et non pas demain, mais toujours, et qu'il me faut la vie même, et la source même, et la différence même, ...⁽³⁰⁾

[だから、死ぬのだ。そしてこの惨めな肉体から抜け出すのだ! 出ていこう、ぼくの魂よ。……これがぼくなのか? このぶっこわれたやつ、これは女の作業さ、女がそれをとっておくがよい。ぼくのほうはよそへ出て行くから。女はとうに、ぼくにとってあの女ではないすべてのものは、存在していなかったのだ。そしていまや、かの女は、ぼく自身を破壊してしまった。ぼくは愛なしではいられない、それも、ますます、明日だけではなく、いつも。ぼくに必要なのは、生命そのもの、根源そのものです、自分とはちがった、そのものなのです。]

ここには、イブの肉体に躓いたアダムが流涕をつづけたのち、キリストが人間への愛のゆえに、肉体を十字架上につけて抹殺し、原罪を消し去ったように肉体を否定し、魂の復活を願う姿が表明され、しかもそれは愛によって成就されなければならないゆえに、メザは愛なしではいられないと訴えるのである、

こうして、この「真昼に分かつ」では、その「愛」を与えることのできるイゼの聖性への変貌が必要なのである。そうして、その変貌は女性その

ものの救いにつながるのである

このようにして、イゼはメザの前に変貌した姿を現わす。

Ysè—Mesa, je suis Ysé. C'est moi.

Ce n'est pas un rêve; Mesa, les rêves sont finis. Il n'y a plus que la vérité.

…mais maintenant je vois clairement qui tu es et ce que tu crois être,

Plein de gloire et de lumière, créature de Dieu! et je vois que tu m'aimes, et que tu m'es accordé, et je suis avec toi dans une tranquillité ineffable.

MESA—Je t'ai vaincue enfin! …j'emporte donc avec moi ce corps lourd qui est ma mère et ma Soeur et ma femme et mon origine!

La voic enfin consommée

La victoire de l'homme sur la femme et l'entrepossession de l'égoïsme et de la jalousie.

Tu dis joie? Mais voici la joie qui est au-dessus de la joie, comme le feu qui devient la flamme et le désir qui devient la justice, et l'amour qui devient l'acceptation.

Tout est consommé, mon âme.⁽³¹⁾

[イゼ—夢ではないわ。メザ、夢は終わりました。あるのはもう、真実だけです。でも、いまになってあたしには、はっきりと見える、あなたがどんな人で、またどんな人だと自分で思いこんでいるかが。栄光と光明にあふれ、神に創られた者! そしてあたしを愛している、あなた。そしてあなたは、あたしに授けられたもの、そうよ、あなたといっしょに、あたくしはいいしれぬ安らぎにつつまれている。

メザ—きみに打ち勝った、ぼくはついに! ぼくは自分とともに、ぼくの母であり、妹であり、妻であり、ぼくの根源である、重い体を、えいと、ひきさらっていくのさ! こうしてやっと、いま、女に対する男の勝利も、エゴイズムと嫉妬の相

互所有も成就された。歡喜だって？ それどころか、いまここにあるのは、歡喜のさらに上にある歡喜、火が炎となり、欲念が正義となるように。また、愛がすべてを受け入れさせるものとなるように。ぼくの魂であるひと、すべては成就された]

このあとで、クローデルの信仰上の問題がメザを通して語られるのであるが、とにかく、イゼとメザは地上での刻々過ぎゆく時間を越えた永遠の国で、愛によって結ばれるという信念を表白して、この悲劇は終わるのである。

このように、多くの受苦ののちに、真夜中の分かれ目を越え、闇から光明へと向かう岐路を越えて、メザは、

—le grand mâle dans la gloire de Dieu, l'homme dans la splendeur de l'août, L'Esprit vainqueur dans la transfiguration de Midi!⁽³²⁾

〔神の栄光に包まれた大いなる雄、八月の、目もくらむ光のなかに立つ人間、いっさいが神の秩序に姿を変える真昼のときに、精霊となって勝ち誇るものだ！〕

と、自からの変貌と勝利とを宣言するのであるが、これは男性と女性との「愛」によって成就されるとされるわけである。

「孺子の靴」では、メザに相当する人物はドン・ロドリグであるが、プルエーズとロドリグは終生、ともに暮すことはなく、互いに遠く離れて始めから肉体を越えた魂の相互の呼びかけに終止するのである。クローデルはこの作品で、イゼとメザの現実的な様相を取り去って、もっと精神的に純化した姿で人物を設定している。

プルエーズはドナ・メルベイユ（奇蹟姫）とも呼ばれ美しい純粋な魂の持ち主であり、つつましく清らかで賢明である。宗教心が厚く、それでいて相手の魂を救おうとする一途な情熱を秘めた女性として描かれる。かの女は終生、ひたむきにロドリグを愛するのであるが、地上では一度も結ばれることはない。かれらはともに、本土スペインを離れ、流謫の地アフリカとアメリカに別れているのである。そうして、不在なものに対する愛の呼びかけは、地上的・現実的様相を捨て去って、精神的・魂的なものへと、

さらに昇華されて描かれているのである。

そうして、第三日目、第八場の守護天使と、眠っているプルエーズとの間に交わされる対話に、「真昼に分かつ」では、まだ幾分、不分明であったクロードルの「愛」についての、また神と人間についての思想が読みとれるのである。

L' ANGE GARDIEN — Crois-tu que c'est pour toi qu'il a été créé et mis au monde ?

DONA PROUHEZ — Oui, oui! Oui, je crois du fond de mon coeur que c'est pour moi qu'il a été créé et mis au monde.

L' ANGE — Es-tu pour une âme d'homme assez grande ?

PROUHEZ — Oui, je suis assez grande pour lui.

L' ANGE — Que dirais-tu si je te demandais entre Dieu et Rodrigue de choisir ?

…Soeur, il nous faut apprendre passage vers des climats plus heureux.
…Mais quoi, si tu n'étais pas seulement une prise pour moi, mais une amorce ?

PROUHEZE — Rodrigue, c'est avec moi que tu veux le capturer ?

L' ANGE — Cet orgueilleux, il n'y avait pas d'autre moyen de lui faire comprendre le prochain, de le lui entrer dans la chair ;

Il n'y avait pas d'autre moyen de lui faire comprendre la dépendance, la nécessité et le besoin, un autre sur lui, la loi sur lui de cet être différent pour aucune autre raison si ce n'est qu'il existe.

PROUHEZE — Eh quoi! Ainsi C'était permis? cet amour des créatures l'une pour l'autre,...

L'homme entre les bras de la femme oublie Dieu.

L' ANGE — Est-ce L'oublier que d'être avec lui? est-ce ailleurs qu'avec Lui d'être associé au mystère de Sa création, franchissant de

nouveau pour un instant l'Éden par la porte de l'humiliation et de la mort ?

PROUHEZE—L'amour hors du sacrement n'est-il pas le péché ?

L'ANGE—Même le péché! Le péché aussi sert.

PROUHEZE—Ainsi il était bon qu'il m'aime ?

L'ANGE—Il était bon que tu lui apprennes le désir.

PROUHEZE—Le désir d'une illusion? d'une ombre qui pour toujours lui échappe ?

L'ANGE—Le désir est de ce qui est, l'illusion est ce qui n'est pas. Le désir au travers de l'illusion est de ce qui est au travers de ce qui n'est pas...

L'ANGE—Voudrais-tu lui donner le mal?

PROUHEZE—Oui, plutôt que de rester ainsi stérile et inféconde, ce que tu appelles le mal.

L'ANGE—Le mal est ce qui n'existe pas.

PROUHEZE—Unissons donc notre double néant !

L'ANGE—Prouhèze, ma soeur, l'enfant de Dieu existe.

PROUHEZE—Mais à quoi sert-il d'exister si je n'existe pour Rodrigue ?...

L'ANGE—C'est en lui que tu étais nécessaire...

Non point cette vilaine et disgracieuse créature au bout de ma ligne, non point ce triste poisson...

Prouhèze, ma soeur, cette enfant de Dieu dans la lumière que je salue.

Cette Prouhèze que voient les Anges, c'est celle-là sans le savoir qu'il regarde, c'est celle-là que tu as à faire afin de la lui donner.

PROUHEZE—Et ce sera la même Prouhèze ?

L'ANGE—Une Prouhèze pour toujours que ne détruit pas la mort.

…C'est l'âme qui fait le corps…

Et moi je ferai de toi une étoile.

PROUHÈZE——Une étoile! c'est le nom dont il m'appelle toujours dans la nuit. Et mon coeur tressaillait profondément de l'entendre.

L'ANGE——Conductrice.⁽³³⁾

〔守護天使——あの男が創られてこの世におかれたのはおまえのためだと、思うのか？

ドナ・プルエーズ——はい、そうです！ 私は心の底から思いますわ、あの方が創られてこの世におかれたのは私のためだと。

天使——おまえは一人の男の魂を容れることができるほど大きいのかね？

プルエーズ——はい、私はあの方を容れることができるほど大きいのです。

天使——おまえはどうするね、もし私が神とロドリゴとのあいだで選べといたら？ 妹よ、私たちはもっと仕合わせな風土へ移ることを学ばなくてはいけないよ。だが、おまえが、私にとって獲物であるだけでなく、餌でもあるとしたら、どうだな？

プルエーズ——ロドリゴの？ あの方を私で釣ろうというのですの？

天使——あの傲慢な男に隣人というものを分からせ、あの男を肉のなかへ押し込めるにはそうするより他に仕方なかったのだ。服従、必要、要求、そうしたあの男のうえにある他者を、あの男に判らせるには、他に仕方なかったのだよ。存在するということの他には理由もないがゆえに、われわれとは異なったあの存在が、あの男に課している掟を分からせるには、な。

プルエーズ——え、何です！ では許されていたのですか？ 一人の人間の他の一人にたいする愛が。……男は女の腕のなかに入ると神を忘れませわ。

天使——神と一緒にいながら、神を忘れるというのかね？ 神と一緒にいる他に、辱しめと死との戸口を通り、一瞬の間にふたたびエデンの園を横切って、神の創造の秘密に与ることができようか？

プルエーズ——秘蹟のほかの愛は罪ではないのでしょうか？

天使——罪さえも、だ！罪もまた役立つのだよ。

プルエーズ——ではあの人私が私を愛することもよかったですね？

天使——よかったですのだよ、おまえがあつた男に欲望を教えたことも。

プルエーズ——幻への欲望であっても？ いつもあの人から遁れ去る影への欲望
であっても？

天使——欲望は存在するもののためにある。幻とは存在しないものだ。幻への欲望は存在しないものを通して存在するものへ向かうのだよ。

天使——悪を与えたいのかね？

プルエーズ——はい、こんなふうに実りもなく不毛のままにいるよりは、あなたが悪と呼ぶものを与えるほうがいいのです。

天使——悪とは存在しないものだ。

プルエーズ——でしたら、私たちの二つの虚無を一つに合わせましょう！

天使——プルエーズよ、妹よ神の子は存在するのだよ。

プルエーズ——でも存在することがなんになりましょう。もし私がロドリゴのために存在するのでなかったら？……

天使——おまえはあつた男に必要だった、ということだ。……だが、それは、私の釣糸の先にかかっている見苦しい横着者ではない、あの哀れな魚ではない。……プルエーズよ、妹よ、私が呼びかけるのは、光のなかのあつた神の子だ。天使たちが視ているあつたプルエーズ、あつた男が知らずに擬視めているあつた女の方だ。おまえがあつた男に与えるために作らねばならぬあつた女の方だ。

プルエーズ——それはこの同じプルエーズなのではないか？

天使——死も打ち砕くことのない、永遠のプルエーズだ。……肉体を作るのは魂なのだ。……、ではこの私がおまえを星にしてあげよう。

プルエーズ——星ですって！ それは、夜のなかでいつもあつたの方が私を呼ぶ名ですわ。それを聞くと私の心は奥底までもわななくのでした。

天使——導きの星だ]

こうして、このことは、永遠の生命に入り、永遠の聖なる「愛」を成就

すべく、プルエーズの魂に刻みこまれるのである。

夫の死後、執拗にかの女を求める売国の徒、ドン・カミイユと夫婦になった地上での現実のプルエーズは、ドン・カミイユとともにモドガールで、副王ドン・ロドリグのスペイン艦隊に包囲される。そのとき、ドン・カミイユの妻であり、使者として、終生、愛してきたロドリグのいる旗艦を訪れる、プルエーズはロドリグの申し出を拒否して、「私の心がすっかりあなた（ロドリグ）に満たされたままで作った」とかの女のいう自分の子どもだけを かれに託し、名誉と約束を守り、ロドリグとはこの地上でもはや再び会うことはないのである。

このとき、プルエーズは死を賭して自己を捨て、ドン・ロドリグにとって永遠のプルエーズへと変貌するのである。こうして、ロドリグの魂を救う聖性を帯した女性、導きの星となるのである。

「真昼に分かつ」で、自分の深刻な体験を通して愛の問題を思索し、数々の愛苦と罪の汚辱のうちにも、神に救い取られるという光明を予感しつつ筆を擱いたクローデルは、カトリックの堅信に裏打ちされながらも、「詩法」にもみられる人間観・宇宙観・神観を築きあげてゆくのである。

女性は男性にとって躓きであり、肉の誘惑である。こうして、男女はともにエデンの園を追われて苦悩の流涕を続けてゆく。これが男女の間の愛の苦悩の諸相となるのである。誘惑と惑溺、墮落と裏切りといったさまざま悪と罪との諸相が繰りひろげられる。原罪を背負った人間のあがきである。しかし、そうした汚辱と苦悩も、すべて最終的に人間の救いに役立つという、クローデルの宗教心に裏打ちされた人間観・世界観が強調された形式で劇作は仕組まれているのである。苦悩を通してのみ、人間は救われるという、クローデルのこれらの作品は、最後は楽観的救済の予感あるいは喜びで終わるように構成されている。

男女の魂の永遠の相のもとに描かれた、これらの劇作は、その形式上では聖史劇的様相は取り去られているのであるが、根本的にはクローデルの

神観が支配している抵抗を感じさせる作品である。それに反して、田園聖史劇として、その題名も「マリヤへのお告げ」とされている「乙女ヴィオレーヌ」を最終的に改作し、時間的には「真昼に分かつ」と「縞子の靴」との中間に創作された作品は、その構成、その登場人物のからみ合いにおいて、いっそう、常套的であり、リアルな印象を与えるように思はれる。

「真昼に分かつ」と「縞子の靴」では、一人の女性を中心として、それに絡む三種類の男性との間の愛の相が描かれるわけであるが、この「マリヤへのお告げ」では、劇を展開させる要因となるのは、聖女のようなヴィオレーヌの清らかさと、悪魔的なマラの嫉妬であって、自己犠牲を伴った清純な愛と、我執に満ち憎悪を秘めた愛との闘いである。そこには、また親子の愛、夫婦の愛も描かれているのである。

ヴィオレーヌは純潔そのもののような少女であり、始めから永遠の女性像を内に秘めた女性として描かれている。

かの女は男系の子孫を持たないアンヌ・ベルコールとエリザベートの長女として父ベルコールのいうように、

…Car elle est nette come l'or.

Elle est simple et obéissante, elle est sensible et secrète.⁽³⁴⁾

〔この子（ヴィオレーヌ）は、まるで金のように純なのだから。すなおだし、従順だし、感受性もある、身のほどもよくわきまえている。〕

理相的な女性として、身心ともに健やかに成長する。やがて、父ベルコールの意志もあって、幼いときから好意を寄せていた養子ジャック・ユーリーと許婚の仲となる、しかし、以前、愛するゆえに自分を襲ったことがあり、今は癩病者となっているが、教会（ユスティシア、正義）建築のために奔走している、ピエール・ド・クラオンに、寛大な許しの接吻を与え、そのためにヴィオレーヌ自からも癩者となる。

奸悪な妹マラは、ジャック・ユーリーへの愛と相続財産についての嫉妬も手伝って、ジャックとヴィオレーヌの仲をさこうとする奸策を用いる。

悲しいヴィオレーヌは、ジャックへの自分の愛とジャックの自分への愛との絶対の信頼の上に自からの勝利を打ち立てようと試みる。それは、純潔な優しい少女ヴィオレーヌにとっては、激しい闘いであり、最後の希望であり、生命への夢であった。

かの女の肉体は穢れている。すべての人が忌み嫌う癩病女である。それは現実の世界では、生命の死を意味している。しかし、それから救われるのは、ジャックの自分への愛によってだけである。そのとき、ヴィオレーヌは自分の純潔と愛のすべてを賭けて、ジャックがそのまま、いっさいを受け入れてくれることを激しく求めるのである。

しかし、ヴィオレーヌの肉体の癩という印しに、ジャックはすべてを信じ、受け入れることができない。失望したジャックはヴィオレーヌを疑い、その純潔と愛とを拒否し、癩という現実の実証の前にひれ伏すのである。こうして、かれは肉体に癩いたのである。

Non point damnée. Mais douce, douce Violaine! douce, douce, Violaine!⁽³⁵⁾

[決して、天罰を受け呪われた女なんかじゃないわ。やさしい、やさしいヴォレーヌよ! やさしい、やさしいヴィオレーヌよ!]

と低くつぶやきながら、ヴィオレーヌは肉に属するいっさいのものを捨てて、父から譲ずられた、そのあるべき地位を去って行くのである。

そうして、ジャックとマラが邪しき嫉妬と我執の愛によって結ばれるのである。

中世封建時代のヴェルコール家の維持が、その主であるアンヌ・ヴェルコールの意志の決定に従わねばならず、各人の恣意は許されないということと、癩者になるというこの二つのことが運命として、劇中のすべての人を支配するのである。そうして、ヴィオレーヌが癩者になるということが、劇の発端のすべてを全く反対に覆がえして、悲劇へと展開させるのである。

こうして、ヴィオレーヌは永遠の女性、聖者への道を歩み、嫉妬と我執

の愛に目のくらんだ、普通の意味ではもっとも人間らしいマラが地上的愛を成就するのである。

やがて、マラに子どもが生まれるが、それは肉と肉のみの結合によって生まれた不正の子どもであり、その条件によって死ぬのである。しかし、子どもへの愛のゆえに、その悲しみの絶望の果てに、マラは神の方へ心に向ける。

清純なヴィオレーヌの無我の「愛」、許しの「愛」の媒介によって、その子どもは神の生命を受けたものとして復活する。

このとき、ヴィオレーヌの内に秘められていた永遠の女性が開花するのである。つまり、女性の聖性への変貌が完全に成就されるのである。

この「マリヤへのお告げ」においても、クローデルは「愛」を人間が救済されるための契機を与えるものとして捉えている。

若く美しいヴィオレーヌの愛と喜び、そうして癪によって失われる愛の苦悩、その乙女の悲しい失恋の苦悩を通して、さらに大きな、愛憎を超えた無我の愛、赦しの愛へと昇華した「愛」を描いているのである。

「真昼に分かつ」でのイゼとメザの愛は地上的なものである。それは「禁じられたもの」を取ることは死であって、エデンの楽園からの追放であり、この地上では「禁じられた女」を取ることは肉体の死であり、利己的な愛の姿である。そうして、最後に神のほうに心に向けて救済を感じつつ、この劇は終わっているのである。

それが「縞子の靴」において、守護天使に釣られながら、我執の愛を捨てたプルエーズのロドリグに対する「愛」となっているのである。ここでは自己犠牲において相手の魂を救うという「愛」が対置される。

こうして、「真昼に分かつ」で、愛について苦悩したクローデルは、この「縞子の靴」に、かれにとっての結論と救いを見出すのである。そうして、この二作の中間にある「マリヤへのお告げ」では、ヴィオレーヌとマ

ラが、つまり天上的なものと地上的なものとのが、「真昼に分かつ」のイゼと「繻子の靴」のプルエーズの役割を分割して代表しており、ヴィオレーヌには聖処女マリヤのイメージが重なって、愛によってすべての人を救済し、さらに地上的生命の復活さえも実現させているのである。

この中間に書かれた中世を舞台にした田園的聖史劇がクローデルの意図し夢想したもっとも理想的な宇宙観・神観の縮図であり、人間救済の愛の原理を表現した作品であったように思われる。しかし、時間と空間に制約された現実の地上では成就され難い内容であって、それが他の二作品において、より現実近づけて描かれたわけである。

しかし、この三作品を通じて、クローデルの到達した人間救済の愛の原理というものはなんら変わっていないのである。

最高の「愛」はキリストの歩んだ十字架の道である。裏切られながらも人類の罪の身代わりとして、一人耐え忍ぶ悲愴で孤独な赦しの「愛」である。そうして、その「愛」を感じずる者だけが救われるのである。すべてをそのまま受け入れ、その罪さえも受け入れる自己犠牲の上に成就される孤独な「愛」である。

情愛も恋愛も、その至高の「愛」を感じるための、また成就するための単なる契機にしかかなり得ないのである。

「愛」による人間同士の交感と合一は、肉体によって果たすことができず、その魂においても、地上では、そうしてすぐには成就されないのである。ただ、その至高の「愛」を感じずる個々の人々の孤独な魂のなかで、神を讃えつつ感得されるだけである。

ここで、クローデルは神への讃歌のうちに、人間探求をあっさりと打ち切る。

クローデルにとっては、その「詩法」⁽³⁶⁾にみられるように、神はかれの魂の中で感得され、確認された実在であり、人間も魂として実在し、永遠の光の中で、神の子として神を全体的に認識する。そうして、神において

自身を認識するのみでなく霊魂相互に認識しあうのである。その相互の認識は「愛」によって成就させられるのである。

しかし、その登場人物が十字架を通して神につながりながらも、地上の生活は死をもって終わらなければならなかったクロデルの多くの劇作品は、十字架以後の「生」を表現することは不可能であり、地上での「生」をも否定しなければならなかったのである。

「愛」は人間救済という、その実体の不明確な観念を実現する契機にしかなり得なかったわけである。

ただ、「マリヤへのお告げ」でのみ、永遠の女性像を体現し、聖女となったヴィオレーヌの「愛」ある死によってのみ、マラをはじめ地上での人々が救われ、その各々の人間性を回復して、地上での「生」を讃美するのである。

- 注 (1) PARTAGE DE MIDI
(2) LE SOULIER DE SATIN
(3) L'ANNONCE EAITE A MARIE
(4) JACQUES MADAULE
(5) ERNEST BEAUMONT
(6) Partage de Mide. Acte I Claudel Théâtre Tome I 987p. Éditions Gallimard. 1967.
(7) 同上 986p.
(8) 同上 991p.
(9) 同上 985, 986p.
(10) 同上 989p.
(11) 同上 991p.
(12) 同上 992p.
(13) Partage de Midi Acte II 同上 1017p.
(14) 同上 1018, 1019p.
(15) Le Soulier de Satn. Deuxième Journée, Scène III
Claudel Théâtre Tome II 735, 736p. Éditions Gallimard, 1965
(16) 同上 736p.
(17) 同上 737p.

- (18) Le Soulier de Satin. Première Journée. Scène V. 同上 683,684,685p.
 (19) 同上 685, 686p.
 (20) Partage de Midi Acte I 前記 Tome I 993p.
 (21) 同上 1006p.
 (22) 同上 995p.
 (23) 同上 996p.
 (24) 同上 997p.
 (25) 同上 1004, 1005p.
 (26) Partage de Midi. Acte II 1022, 1023, 1024p.
 (27) 同上 1024, 1025, 1026p.
 (28) 同上 1026, 1027, 1028p.
 (29) Partage de Midi. Acte III 1050, 1051p.
 (30) 同上 1051, 1052p.
 (31) 同上 1053, 1054, 1055, 1058p.
 (32) 同上 1062p.
 (33) Le Soulier de Satin. Troisième Journée, Scène VIII 前記 816,817,818p.
 (34) L'Annonce faite à Marie. Acte I, scène III
 Claudel Théâtre Tome II 40p. Éditions Gallimard 1965
 (35) L'Annoce faite à Marie. Acte II, Scène III 同上 57p.
 (36) ART POÉTIQUE, Traité de La Co-Naissance V Article Cinquième参照

<参考文献>

- JACQUES MADAULE 「Le Drame de Paul Claudel」 Deslée de Brouwer 1947.
 ERNEST BEAUMONT 「Le sens de L'Amour dans Le Théâtre de Claudel」
 Lettre Modernes 1958
 .ANDRÉ VACHON 「Le Temps et L'Espace dans L'oeuvre de Paul Claudel」

日本語訳引用文

- 「真昼に分かつ」 鈴木力衛・渡辺守章訳 『世界文学大系』51, 筑摩書
 房, 昭和35年
 「孺子の靴」 中村真一郎訳, 人文書院, 1968
 「マリヤへのお告げ」一部分 鈴木力衛・山本功訳 『世界文学大系』51,
 筑摩書房, 昭和35年